

【学校教育目標】 自分とみんなのために 心を尽くし、学びを深め、ともに動く 大小っ子の育成
【目指す児童像】 気づく子 学ぶ子 元気な子

大村市立大村小学校

学校だより

第3号

令和7年4月30日発行

文責：校長 堺 邦寿

玖城のほとり



★ 進級・入学から1か月が過ぎました ★

明日から5月に入ります。お子様の進級・入学から1か月が過ぎようとしています。この1か月間には、新たな友だちや先生との出会い、昨年とは違う学年としての仕事などもあり、環境が大きく変わりました。今月は、始業式、入学式、1年生との顔合わせ会（1、6年）、交通安全教室（1、2、6年）、全国学力・学習状況調査（6年）、歓迎遠足、歓迎集会、委員会活動（5、6年）、代表委員会（4年生以上代表）、各種検診など、多くの行事がありましたが、子どもたちは本当によく頑張っています。それぞれが自分の役割を自覚し、1、2年生のために、学校のために、努力しています。大小っ子は、自分のためだけでなく、みんなのためにも努力する素晴らしい子どもたちばかりです。どうぞ、ご家庭でも学校のことを話題にいただき、お子様の頑張りをほめていただけるとありがたいです。よろしくお願いします。

ゴールデンウィーク明けからは、5月25日（日）の運動会に向けて、本格的に練習が始まります。少し疲れが出てくるかもしれませんが、お子様の様子で気になることがあれば、遠慮なく担任までお知らせください。家庭と学校が協力しながら、よりよい教育につなげてまいりますので、よろしくお願いします。



★ 授業参観・PTA総会へのご参加 ありがとうございます ★ (学校経営方針について)

4月23日（水）の授業参観・PTA総会へのご参加、誠にありがとうございました。多くの保護者の皆様に授業参観にお越しいただき、子どもたちも、とても喜んでいただけました。多くの保護者の皆様にお越しいただけたことは、私ども大村小学校教育にかかわる者への大きな期待であると認識しております。引き続き、611名の子どものため、力を尽くしてまいります。よろしくお願いします。PTA総会では、学校教育目標についてお話をいたしました。ここで紹介します。

今年度は、学校教育目標を『自分とみんなのために、心を尽くし、学びを深め、共に動く児童の育成』、めざす児童像を「気づく子、学ぶ子、元気な子」としました。合言葉は、「自分とみんなのために」です。

「自分を大切にすること」を基本として、友だち、家族、地域社会など、「みんなのために」も心と力を尽くし、周囲の方々との関わりの中で、自分が誰かのために役に立っているという自己有用感を高めたいと考えています。「自分を大切にすること」とは、子どもにとって、どうすればよいのか、難しいところがあります。「自分を大切にすること」とは、「自分に自信をもつ」、子どもたちに「自信をもたせる」ことが基本となると思います。よく言われる「自己肯定感」とか、「自尊感情」をいかに育てるかということです。

この「自己肯定感」や「自尊感情」は、「自分だけ」というせまい考えでは、独りよがりのものになってしまう。やはり、周りとのかかわりの中で、自分が必要とされている、誰かのために役に立っているという「自己有用感」を実感することで、子どもたちの自信は、本物の自信となります。

これからの社会を生き抜く子どもたちには、自分のことだけでなく、周りにも目を向け、周りの人と一緒に動くことで、よりよい社会をつくっていく力が大切になってきます。

本校では、子どもたちが生きるこれから先の時代に目を向けた教育を進め、子どもたち、保護者の方々、地域の皆様にとっても、自慢の大村小学校をつくりたいと考えています。

この実現には、保護者の皆様のお力添えなくしては、なしえません。611名の子どもたちを真ん中に据え、学校と保護者の皆様と一緒に、子どもたちを支えていければと思います。今後、何かとお願いすることもあるかと存じますが、ご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願いします。



※裏面に、木村指導教諭作成の「特別支援教育だより」No.2を載せております。どうぞお読みください。

～みんなちがって みんないい (その2) ～

今回は昨年と同じ「応用行動分析学(ABA)を用いた子育て・教育」についてお話しします。

「応用行動分析学 (ABA)」という言葉聞いたことがある人も多いのではないかと思います。これはアメリカの心理学者バラク・スキナーが提唱した行動分析学が基礎になっており、「人の行動は過去の行動結果に依存し、もし過去の行動結果が悪い物であれば、その行動は繰り返されない確率が高く、良い結果であれば何度も繰り返される」という「強化理論」に基づいています。

現在、教育だけでなく、スポーツコンサルティングや会社経営等の分野でも「応用行動分析学」を用いた「人材育成」が浸透していて、経営管理職研修内容にも入っているほどです。「応用行動分析学」が人間の「行動を変える」ことは実証されており、「人を育てる」上で有効であることが広く知られるようになったからこそだと言えます。

ここでは、「子育て」「教育」における「応用行動分析学」について簡単にお話しします。

「応用行動分析学」を使った子育てのキーワードは、「良くないことをしているのに、報酬を与えてはいけない」です。

人の行動は条件によって決定づけられていきます。良い行動も悪い行動も、条件によって強化されたり弱化されたりします。

去年は「コンビニでの子どもの行動」についてお話ししました。泣いてお菓子をせがむ子どもに、周りの目を気にしたり根負けしたりして、一度でもお菓子を与えてしまうと、以後ますます行動がエスカレートしていくという話でした。

子どもは相手を試します。「どんな行動を取れば相手は自分の要求をかなえてくれるだろう」という駆け引きを繰り返します。

「後で絶対に宿題するから、もう少しだけゲームをさせて」という要求を親に提示した時、「じゃあ約束ね」と言ってゲームの延長を許した場合、さて本当に約束を守るのでしょうか？

「応用行動分析学」のキーワードを踏まえると「交換条件には乗らない」が正解です。このような条件の提示は「お試し行動」です。「お父さんお母さんはどんな交換条件を出せば、自分のいうことを承諾するだろう」と子どもは親を試しています。親が忙しく、時間が無いときを選んで交換条

件を提示してくることもあります。一度、交換条件をのんでしまうと、必ず次も同じ要求をしますし、突っぱねると更なる激しい行動（例えば泣いたり叫んだり、物を壊したり家を飛び出たり）などの抵抗を見せるかも知れません。根負けして許してしまうと、「良くないことをした」⇒「欲しいものが手に入る」という経験を重ねることで「負の行動」を「強化」していくことになります。これがスキナーの言う「人の行動は過去の結果に依存する」ということなのです。

この時、「約束を守らなくても、少し叱られただけで許された」という経験があれば、今後も口約束を守ることはありません。そうならないためには、「延長をさせないこと」が最優先ですが、もし子どもの要求を受け入れたときは「必ず宿題をさせる」「約束を守った時はしっかり褒めて、褒美を与える」ことで約束を守る習慣が身に付いていきます。

これらの行動や習慣は、子どもに限らず大人も同じで、人の行動は過去の経験と結果に依存し強化されていきます。

約束を守らせること、守れたら報酬（誉め言葉等を含む）を与えること、これにより良い行動や習慣は身に付いていきます。

もちろん子どもの特性や思春期の不安定さも関係していますが、もし子育ての中で「子どもが言うことを聞かない」「育てにくい」と感じているのであれば、少なからず間違った対応の積み重ねが関係している可能性は否定できません。こうして積み重ねられた人格形成は、成人後の性格にも反映されます。

子ども達のこのような行動は学校でも同じように見られるので、我々職員も「応用行動分析学」に則った対応を心掛けています。

具体的には、普段から普通にできていることを褒めたり励ましたりするように心掛け、困った行動にはなるべく反応せず、できていることを認めるようにしています。誰もが不安や自信の無さ、不得意なこと苦手なことなど、何らかの困り感を抱えています。そのことに寄り添うことも大切ですが、それ以上にできていることを認める・褒めることの方が大切です。

この理論を日常生活の様々な場面に置き換えて考えてみてください。子育てのヒントがたくさん生まれてくるのではないのでしょうか。